昭和61年(1986年)8月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)

8　AUGUST, 1986　毎月10日発行　第76号

教皇様の声

託身の秘義と教会

聖霊の力により生まれかわり、キリストの体となる

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1986
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

1　「私の口の声を聞き、み前にたえず上げるささやきに御耳をとめたまえ。」(詩篇19(18)・15)

マリアとヨゼフ。この二人の尊い模範に倣い、私たちも絶えず神に心を向けることができますように。「これらすべてのこと」、すなわち自らの胎内で人となられたみことばについて言われたこと、起こった出来事すべてを「注意深く心にとどめて考え続けた」(ルカ2・19)マリア、そして、ナザレトにおける一家の忠実な保護者であり、マテオ福音書に見られる通り、つねに主の御使いの命じるままに行動したヨゼフのように。

ここでカルメル山のことを思い起こさずにはいられません。瞑想の山、預言者と聖人の聖域、神秘生活と神の体験の象徴であるカルメル山を。

マリアとヨゼフの名は、クリスマスの神秘をめぐる黙想へと私たちをいざないます。同様に、ベトレヘムとナザレトに目を向け、神の御子イエズス・キリストが、私たちと同じく日々を労働と従順のうちに生きたその地でのできごとを思いめぐらせば、神のみ旨をつねに心にかけるとはどういうことかわかるでしょう。

2　使徒聖パウロは教会を「キリストの体」と呼んでいます。復活したキリストがお住まいになる生きた組織体だからです。

キリストは「一つのからだ」(コリント①12・12)、多くのメンバーから成る生きた体であって、そこでは洗礼を受けた人全員が、聖霊によって一つに結ばれて加わっています。聖霊がすべての人を主と共に一つの存在へと結びつけるのです。「ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由民も区別なく」(前掲書12・13)あらゆる人を。洗礼を受ければ、一人一人がみな組織体の生きた細胞となって頭であるキリストの力によって支えられ、一つに結ばれます。キリストはすべての人を形造り、「多くの肢体で成り立っている」(前掲書12・14)ご自身の一つの体、お互いにつながりを持ち、生きた体の各器官のように各自が自分の役割を持った一つの体としてお集めになりました。こうしてすべてのキリスト信者は、与えられた各自の生活を通してキリストとじかに結ばれます。それのみか、他の兄弟たちとも緊密な関係を保つのです。体には切れ目がなく、各部が互いに助けあう(前掲書①12・25参照)からです。キリストの神秘体もこれと同じこと。「一つの肢体が苦しめばすべての肢体はともに苦しみ、一つの肢体が尊ばれればすべての肢体がともに喜ぶ。」(前掲書①12・26)このように、教会をキリストの体であるとする啓示の光に照らして見れば、キリスト信者各自は自分が何のために存在するのか、自らの選択と行動がいかに重大な結果をもたらすかを悟ることができるでしょう。

ご託身(受肉)の秘義と教会

3　キリストのご託身(受肉)の秘義、すなわち神の御独り子が、聖霊によっておとめマリアから御体をうけて人となられたその秘義をさらに「発展」させた結果、教会が生まれたと言えましょう。教会の中に働く聖霊の御力で人は新しく生まれ変わり、キリストの肢体となります。このように、教会は地上における目に見えるキリストです。教会においてキリストは人々の間におられる御方、人々が直接に見聞きし、知り合うことのできる御方となられます。その御体である教会においては、キリストは過ぎ去った昔の人物ではなく、今なお私たちとともに生きておられる御方です。第二ヴァティカン公会議はこの秘義を特別に重視しました。

「子は自分の霊を与えることによって、諸国民から呼び集めた自分の兄弟たちを、自分の体として神秘的に構成したのである。この体の中で、キリストの生命が信ずる者に分け与えられるのである。…人間の体のすべての部分は多数であるが、一つの体を形成するように、信者たちもキリストにおいてそうである(コリント①12・12参照)。…この体の頭はキリストである。…すべての成員は、自分の中にキリストが形づくられるまで、キリストに似たものとなるように努めなければならない(ガラテヤ14・19参照)。…キリストはその体、すなわち教会の中に、種々の任務のたまものを絶えず用意している。われわれはこのたまものを受けて、キリストの力によって、救いのために互いに奉仕し合う。こうしてわれわれは、誠意のこもった愛を実践しつつ、すべてを通して、われわれの頭であるキリストに向かって成長する(エフェゾ4・11〜16、ギリシア文参照)。」(『教会憲章』7)

4　体であるとは多様であって一致していることを意味します。どんな組織体も、それぞれの働きをなす多種多様な器官からできあがっているものです。同じく教会もさまざまな人々と機関から成り立っており、それらが全体として一つにまとまりながら、おのおのが独自の使命をもっています。ただ一人の主、ただ一つの教会の下に、種々のたまものと恵み、異なった多数の召しだしと役務があるのです。(コリント①12・18〜29参照)

つねに心に留めておくべきなのは、教会の力はその明晰さにあるということ。これによって教会の構成員は、聖職者も信徒も、神的な一致のもたらす偉大な力に気づきます。キリストは教会という神秘体を通して信者を招き、積極的に真理を伝え、愛にもとづく奉仕に精をだすことができるようにしてくださいます。

5　ここで皆さん、ちょっと考えてみてください。教会の中の小教区とは何でしょう。教会の構造全体の中で小教区という共同体はどのような位置を占めているのでしょうか。

新しい教会法典は、小教区につい

刷新がうわべだけで終わらぬように
回心と償いを！
アルスの主任司祭

て定義した公会議文書を引用しています。それによると、小教区は「信者による特別な共同体」(515)であり、目に見える教会にあたり、世界中に決まった仕方で存在します。(『典礼憲章』42参照) 地方教会の、言わば小さな細胞である信者一人ひとりは、この小教区を通して、神の民という広くそして普遍的な共同体に組み込まれているのです。(『信徒使徒職に関する教令』10参照) 小教区の存在は、そのような一致と交わりによって支えられています。教会を形づくる御聖体の秘跡が祝われるのは小教区です。小教区では神の言葉が人々に伝えられ、信仰を表明するよう促します。こうして現実に全信者を結びつけている普遍の絆が効果的に保たれるというわけです。

6　小教区は教会の縮図とも言えます。構成的にも、また役割の面からも、全教会を範とした共同体であるからです。小教区は教会の示すところに従って司牧に従事する人々を集め、秘跡と神のお言葉によって結びつけます。小教区の働きは、各自に割り当てられたさまざまな使命――あるいは聖務、あるいはカテケージス、慈善事業、家庭生活や信仰の目を開かせるための教育など、多くの分野への召しだしに応えることによって果たされます。聖霊はこれらすべてのたまものを、神の家族そのものである小教区に、豊かに降り注いでくださいます。小教区の中で、「神の民」は人間生活の具体的な仕組みのなかに入り込むのです。

7　(…) 教会が生まれたばかりのころ、エルサレムのキリスト信者の共同体――最初の小教区と呼べましょう――が、聖母のもとに集まったときのように、みなさん方も、職務に対するこまやかさと熱心さをもって集まってください。みなさんの務めは、主に仕え、福音のためにたたかうことです。聖ヨゼフのように、キリストの守り手となってください。みなさんの住む社会、また家庭のなかで。同時に人々がキリストを知り、愛するように、できる限りの手段を講じてください。(…)

宣言することと祝うこと

8　教会の中では、司教は誰でもキリストの代理者(Vicarius Christi)であり、みな聖霊の呼びかけによって教会に加わった人々です。

司教の眼前には、キリストの救世事業の全貌が横たわっています。すでにナザレトでその概略が示されたように。まさにその地、故郷のナザレトで、キリストは人々を前にイザヤの書を読みあげました。

「主の霊は私の上にある。私に油を注いで聖別されたからである。霊は、貧しい人々に良い便りをもたらし、捕らわれ人に解放を、盲人に見えることを告げ、しいたげられた人に自由を返し、主の恩寵の年をのべ伝えるために、私を遣わされた。」(ルカ4・14～19)　つけ加えて、「あなたたちが今聞いたこの聖書のことばは今日実現した。」(ルカ4・21)

この時以来、イザヤの預言したナザレトのイエズスの救世事業は、今なお実現しつつあります。世界に広がる教会の宣教を通じて、果たされつつあるのです。

今日、イザヤの言葉はこの小教区で、私ローマ司教の執り行なう聖務を通して現実のものとなりました。

「キリストの体」は、真理の言葉と恩寵のパンによって、生かされているのです。

(一・二十六)

(…)アルスの主任司祭の主たる賜(カリスマ)、そして彼が有名になった理由が、赦しの秘跡への疲れを知らぬ信心であったことは確かです。このような模範を前にすると、当然私たちは、全霊を傾けて赦しの秘跡を大切にしなければならないことがわかります。(この点については一九八三年の世界代表司教会議で強調されました。)　教会の役務者が、たゆまず勧めかつ歓迎すべき、回心と償い、赦しを求めることがなければ、大いに望まれる刷新は表面的なものに終わり、砂上の楼閣と化してしまうでしょう。

アルスの主任司祭の第一の気づかいは、信者に悔い改めの心をおこさせることでした。彼は神の赦しがいかに美しいかを徹底して教えました。ヴィアンネイは、その司祭生活と全精力を、罪人の回心のために費やしたのではなかったでしょうか。神の慈しみの心がとくにあらわれるのは赦しの秘跡においてであります。それゆえ、アルスの主任司祭はあらゆる所からやって来る人々を放っておけなかったのです。一日に十時間、ときには十五時間以上も、告白場にいたものです。これは彼の犠牲のうちで最大のもの、一種の殉教と言えます。殉教と言うのは、第一に暑さや寒さなどからくる肉体的な意味で、第二には、告白される罪と、それ以上に人々の痛悔の不足からくる精神的な意味で。「私は泣かない人ゆえに泣く。」　無関心な人々を全力をあげて受け入れ、人々を神への愛に目覚めさせるため、神はアルスの主任司祭に、罪人を神と和解させ、完徳を目指す人を導く力をお与えになりました。神が贖いのみわざにヴィアンネイの協力をお求めになったのは、実に赦しの秘跡においてであったのです。

前世紀にくらべると、私たちは、悔い改めと赦しの準備、赦しの感謝の共同体的な面を再発見してきました。しかし、秘跡による赦しは常に、役務者の仲介のもとに、十字架にかけられたキリストとの個人的な出会いを要求します。罪を悔いる人が急いで告白場に行かないことが多いのは残念です。色々な理由で大勢の人が告解から全く遠ざかってしまった今こそ、赦しの秘跡作戦とも言うべき司牧をくりひろげることが緊急事となります。そのためには、神との正しい関係、神と人とに自らを閉ざしてしまった時もつべき罪意識、心を改めて神が意のままにお与えになる赦しを教会を通して受ける心構え、が必要になります。信者の方々に、赦しの秘跡の実りある受け方を忘れぬよう注意しなければなりません。そして、偏見や根拠のない恐れ、惰性を克服する必要もあるでしょう。現状が現状ですから、私たち(司祭)がいつでもすぐに赦しの秘跡を授ける用意をしていなければなりませんし、必要なだけの時間をさき、充分な配慮を怠らぬようにすべきです。赦しの秘跡は他の活動に優先するまで申し上げたい。このようにすれば、信者のみなさんは、私たち司祭がアルスの主任司祭のようにこれほど重要視するこの秘跡の大切さを理解してくださることでしょう。(一九八六、聖木曜日、『司祭への書簡』より)

「教皇様の声」専用ファイル新刷入荷！
【ポリプロピレン樹脂製(ロイヤルレッド)金文字装丁】

品切れのため長らくお待たせしておりました「教皇様の声」専用保存ファイルが装いも新たに入荷いたしました。ご希望の方は係までお申込みください。

定　価　700円
送　料　1～2冊・240円　3～4冊・350円
　　5冊以上・600円
「教皇様の声」が3年分保存できます。

説教・講話・書簡等の抄訳

神学者は神の真理に仕えるしもべ

フライブルグ大学で、神学部の教授らに仏語と独語でおはなしになった。(前半)

神学の目的

神学者の仕事とは神の秘義を伝えることであります。ですから、恩寵の力に助けられ黙想によって教えをうけて初めて、希望の意味を頭の中で考え、人々に明らかにすることができるのです。神はご自身を人間に示し、ご自分のことが人々にわかるようになさいましたから。神は人類とこの世をお愛しになり、人々が神を愛するようにとご自身をお与えになります。まことの光であるみことばは、すべての人々を照らし、人々が神の子になれる力を授けてくださいました。(ヨハネ1・9～12参照)神の現存を悟ることができるのは、信仰と愛徳のおかげです。聖霊は生きた希望と共に、この二つの徳を私たちの心にお与えになりました。(ローマ5・5参照)　それゆえ、私たちにご自身を示された愛なる神、その神と出会い、神を知る、これこそ神学者の務めです。信者の神理解を助け、神の美しさを明らかにし、生命の源と意味を捜し求める人々にそれらを教えてやらねばなりません。神のみことばが私たちに与えられ、救いの歴史のなかでも根本的なできごとが明らかになりました。そうすることによって、救いの意味を明かしてくださったのです。神がご自分の計画を人間に打ち明けてくださったというわけです。それゆえ教会はたえず神のメッセージを伝え、決してやめません。測り知れない賜として聖書を受け入れる人々に対し、聖伝に則って聖書を保ち教える教会と一致しつつ、その汲めども尽きぬ豊かさを詳しく調べる使命がみなさん方に委ねられています。兄弟姉妹たちがみことばにおいて「道と真理と生命」(ヨハネ14・6参照)を見出し、さらにキリストのみもとに向かって前進するのを助けるのです。神学者は神の真理に仕えるしもべであって、教会内で代々つづいている聖伝の偉大な働きに加わるものです。ペトロの呼びかけに従って、今日、兄弟や世界中の人々に、「おのれの内にある希望の理由」を説明する人間なのです。(ペトロ①3・15参照)

神学者の皆さんにもこの世の訴える声がよく聞こえるにちがいありません。不安定で次々と変わる世界の声が。現代人は将来のことを心配し、暗中模索しています。自らの人生のもつ意味も、何を基準に行動すればよいのかもわかっていません。宗教を見て、世界は自らに問いかける、宗教とは決定的に必要なことではないのかと。信者の信仰が試されているのです。ですから、兄弟たちに一層奉仕するため、今まで以上に信仰教育を提供しなければなりません。神の光をうけ入れて、新旧の問題を明らかにすべきです。自己の研究のための見方をいたずらにあちこちに当てはめるのではなく、むしろ個々の問題を信仰に基づいた正しい見方で考えていかなければなりません。現代のキリスト者が霊的に生活を送り、行動し、証しをたてるためには、もう一度、神の秘義、キリストの秘義、教会の秘義を深く理解しなおす必要があります。そうすれば実際の多種多様な問題についても、適切な方法で立ち向かうことができるでしょう。

神学と人間科学

神学は科学的な学問です。神学がつねに信頼されているのはこの学問の厳しい研究姿勢のおかげに外なりません。この姿勢を保つために様々な研究方法を取り入れていますが、それは一般に「人文科学」で使われている方法と同じ、すなわち、歴史、言語、社会、心理学などに関する数かずの方法や発見を総合したものであります。今日、キリスト教のメッセージを表現するためには、科学が提供するものをどんどん取り入れていくべきです。そうすれば、現代の諸問題に答えるとともに、新しい学問の分野にキリストの教えを広めるためにも役立つことでしょう。しかしながら、同時に神学の批判的機能を働かせることが必要です。言いかえれば、注意深く識別すること。流行の思想とか研究技術とかが神のメッセージより大切にされるはずはありません。どんな言語にも表現不可能なことがあり、それゆえ限られた範囲の中で完全に把握することはできないのです。また、神についての研究が他の学問に吸収されてしまうこともありえません。神のお言葉は人のことばをはるかに超えるものですから、その重要性を研究し尽くすことは決してできないでしょう。神学の研究対象は、生きている人格をもった神であります。この神の実体とみわざについて、啓示はいろいろと教えてくれますが、その示された事柄を理解することはできても、決してそれらを勝手気ままに牛耳るようなことがあってはなりません。神学にも限界のあることは、神学の取り扱っている対象の崇高さを見ればあきらかです。今日使用可能な研究の道具が以前の研究に役立った道具とはっきりと比較された上で使われないとすれば、それは神学的推理と厳密な研究方法との調和をこわすことになってしまいます。従って、かつての哲学が残してくれた理性を働かす方法をよく学び、実践することが大切です。神学が本来の態度を守るために必要なことは、神学に役立つ学問を総合し、上手に使いこなし、またそれぞれの学問がどこに役立つかをしっかりと見きわめることであります。神学という学問は現代の知的生活には欠かせないものですが、それと同時に神学者は生きた伝統の中で働くものであり、神のみことばが歴史の中に敷いてくださった道に従って活躍すべきだからです。(つづく)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393

不変の教え

創造シリーズ I
創造についての教えは諸宗教の出会いの道

1　創造に関する真理はキリスト教信仰の対象であり内容であります。創造については啓示による以外に明示されているところはありません。聖書と関係のない神話が、宇宙開闢についてあいまいに物語っているだけであって、プラトンやアリストテレスのような大哲学者も、完全な存在として絶対者としての神について高度な考えをもっていたにもかかわらず、創造については考え至ることができなかったのです。（啓示の）助けを借りずとも人間の知性は、この世界と偶有的な存在（つまり必然的に存在しないもの）が絶対者に依存するという真理を知ることができます。しかし、このような依存関係が〈創造〉による依存関係であると言い得るのは、神の啓示によらねばなりません。それゆえ創造は信仰の真理であるというわけです。

2　創造については信仰宣言の冒頭の部分で宣言されています。この事実は使徒信経のように古いものの場合も同じであります。「私は天地の創造主を信じます。」　ニケア・コンスタンチノープル信経も同様です。「われは信ず、…天と地、見ゆるものの見えざるもの、すべての造り主を。」そしてもう一つ、パウロ六世の〈神の民のクレド〉から引用しておきましょう。「われわれは、自分の過ぎ行く生活が行なわれる所であるこの世界のような見えるものと、天使とも呼ばれている純粋な霊のような見えないものとを創造し、各人間の中に霊的で不死な魂を創造された唯一の神を信じる。」

3　天地と人間の創造に関する真理はキリスト教信経の根本でありますが、それはその内容のゆたかさによります。世界は神の創造のみわざの結果であると世界の起源に言及するだけでなく、神が創造主であることも啓示しているからです。神は預言者を通じて、またこの終わりの日々には御子を通じて語られ（ヘブライ1・1参照）、啓示を受け入れる人々に、御自分が世界をお造りになったことだけでなく、創造主であるとはどういうことかをもお示しになったのです。

4　事実、新旧両約聖書には、創造と創造主である神について数多くの真理が記されてあります。聖書の最初にくる創世の書は創造に関する真理から始まっています。「神は天と地をつくられた、それが始まりであった。」（創造の書1・1）聖書の他の書をみても、同じことがくりかえしくりかえし出てきます。というわけで創造は、イスラエルの信仰のなかに完全に浸透していたことがわかります。少なくとも二、三の箇所を思いだしておきましょう。まずは詩篇。「地とそこにあるもの、世とそこに住む者、すべて主のもの。主は地の基を水の上に置いた。」（24(23)・1～2）「天はあなたのもの、地もあなたのもの、世とそこにあるもの、それはあなたに立てられた。」（89(88)・12）「海は彼のもので主がそれをつくられ、陸もその御手につくられた。」（95(94)・5）「主の慈しみは地に満ちる。天は主のおことばによって……つくられた。主が仰せられれば物は存在し、主が命じられればことはできあがる。」（33(32)・5～6、9）「主の祝福を受けよ、天地をつくられた主の祝福を。」（115(113)b・15）知恵の書では、同じ真理を次のように述べています。「父祖の神よ、あわれみの主よ、そのみことばで宇宙を……つくられたお方よ。」（9・1）また預言者イザヤは、一人称を用いて創造主である神のおことばを伝えています。「私はすべてをつくった主である」（44・24）と。

神は被造物のなかに、被造物は神のうちに

新約聖書でもこの点ははっきりしており、例えば、ヨハネ福音書の冒頭は次のとおりです。「はじめにみことばがあった。…万物はみことばによって造られた。造られた物のうちに、一つとしてみことばによらずに造られた物はない。」（1・1、3）ヘブライ人への書簡では、「信仰によって私たちは、万物が神のおことばによって造られ、見えるものには見えない原因があることを理解する」（11・3）と言っています。

5　創造に関する真理によると、神の外にあるものは全て（神以外は全て）神に呼ばれて存在するに至った、ということになります。聖書にはこの点を明確に述べる章句があります。マカバイ書にでてくる七人の子を持つ母親の言葉です。死の危険が迫ってきたとき末っ子に話しかけます。「天地にあるすべての物をよく見ておくれ。神はそれらのものを、前からあった何かの物から造られたのではない。人間はそのようにして造られた。」（マカバイ下7・28）ローマ人への書簡をみると、「神は、死者を生かし、存在しないものを存在させられると、アブラハムは信じた」とあります。

このように、「創造」とは、（無から作ること、存在へと呼びだすこと、つまり無から存在を作りだすこと）であります。聖書の言葉づかいからもそれは明らかです。「神は天と地をつくられた、それが始まりであった。」（創世の書）（造った）というのはヘブライ語で「バラ」と発音する語の訳であり、神のみが主体となりうるような特異な行為を示します。流浪の生活のあとでは、はじめに神の介入があったという事実はさらに正確に理解され、マカバイの第二の書になると、神はそれらのものを、前からあった何かの物からではなく造られた、と記されています。さらに一層意味を明確にして、教会の教父と神学者たちは、（無からの創造）と表現しました。（creatio ex nihilo もっと正確には、ex nihilo sui et subiecti）

創造において神は、新しい存在の唯一にして直接の源であります。つまり、（神の創造以前から）存在するものを認めません。

6　創造主である神はある意味で被造物のそとに在し、被造物は神のそとに存在する。それと同時に、被造物は全く完全にその存在を神に負っています。被造物はまったく完全に神の御力を源としているからです。

神はその創造の力（全能の力）によって（被造物のうち）にあり、被造物は（神のうちにある）とも言えましょう。ところで、神が遍在なさることはたしかですが、それによって、全てに存在をお与えになるという意味での神の超越性が弱められることにはなりません。

7　聖パウロがアテネのアレオパグスに足を踏み入れたとき、集まった人々に次のように話しました。「私がこの町を歩いて、あなたたちの礼拝するものを見ていますと、（知られざる神に）と記した一つの祭壇を見つけました。あなたたちが知らずに礼拝しているものを私は知らせましょう。この世とその中にあるすべてをつくられた神は天地の主であります。」（使徒行録17・23～24）

アテネの人々が、異教の多神教信奉者でありながら、唯一の神、創造主について耳にしても何ら反論しなかったという事実は注目に値します。すなわち、創造に関する真理は、異なる宗教を信じる人々の間にあって、出会いの道であるということです。創造についての真理は、聖書に記されてあるほどはっきりしてはいないながら、種々の宗教が根本的なことがらとして内に秘めているからかもしれません。（八六・一・十五）